学生の職業的アイデンティティの検討
――30 年前との比較を通して――

Vocational Identity in Undergraduates

浦　上　昌　則

Masanori URAKAMI

要　約

本研究は，約 30 年前との比較を通して，大学生の職業的アイデンティティ・ステイタスについての理解を深めることを目的とした。また独自に得たデータに対しては多少の追加的分析を行った。比較の対象とした研究は，1983 年に発表されたものである。結果としては，看護や教員養成といった専門職養成学部に属する学生と，一般的な文系，理系に属する学生では職業的アイデンティティ・ステイタスの様相に大きな違いが認められ，専門職養成学部生の方が同一性達成的心性，早期完了的心性が強く認められた。また約 30 年前との比較においては，モラトリアム的心性の減少，同一性拡散的心性の増加といった特徴が認められた。これらの結果を踏まえ，社会背景の相違などを考慮しつつ，現代大学生の職業的アイデンティティについて考察を行った。

問題と目的

従前よりアイデンティティという概念は，青年期の心性を理解し，記述するために有用な概念として認識されている。それゆえ多様な側面からの研究があるが，その中に職業的アイデンティティ（職業アイデンティティ）の研究群がある。本研究は，現代大学生の職業的アイデンティティ・ステイタス（職業的同一性地位）についての理解を深めようとするものである。

アイデンティティと職業の関連性に関しては，Erikson 自身も触れているが（Erikson, 1950/1977），宮下・田辺・小柳・岡本・上地・磯部・沢田・森川（1984）が述べているように，現代社会においては，「人が自分が何者であるかという自己定義を行う際に，『自分が何をしているのか』つまり職業が何であるかという問題は避けて通ることができない」ためである。ある役割を果たしている者として社会に認識，承認され，自己を定位していくことが，心理社会的なアイデンティティにとって重要なものであることは疑いないであろう。

ところが，このように重要性は認められているものの，職業的アイデンティティの研究は我が国で多く行われているとはいいがたい。近年は看護師等の専門職者，もしくはそれに向けた教育課程

にある者を対象とした，いわゆる専門家アイデンティティ（professional identity）についての研究（たとえば畠中・遠藤，2016 や三津橋・関，2016 など）はあるが，専門職に限らない職業的アイデンティティの研究は少ないままであり，それに関する知見は多くない。ほとんどの学生はまだ職業についていないが，卒業後は就職するものが大半となるため，予期的社会化がすすみ職業的アイデンティティについてもある程度は形成がすすんでいるものと考えられる。ところが，その様相についても十分な知見は蓄えられていないと指摘できるだろう。

加えて，個人のアイデンティティは社会に大きく影響を受ける。すなわち，社会が変化すればアイデンティティの有様も異なると考えられる。我が国において，ここ数十年間で職業をとりまく環境が大きく変化したことはあえて指摘するまでもないであろう。教育現場においてもこのような変化に対応した大きな動きがあり，キャリア教育の登場はその最たるものといえよう。このように職業的アイデンティティに影響を与える社会の様相は変化し続けている。社会の状況が変化し続けていることを考慮すれば，学生の職業的アイデンティティは，ある時点での検討はもちろん，断続的に調査を行い比較するという検討もなされるべきであろう。

そこで本研究では，専門職の課程のみならず，多様な大学生の職業的アイデンティティについてステイタス論の観点から検討する。また現在の大学生の様相について検討するにあたり，30 年程度前の大学生と比較を行いたい。断続的な検討の必要性については先にも触れたが，今回 30 年程度という期間を考慮したことにはいくつか理由がある。まず，30 年程度は概ね一世代といえるためである。加えて，ここ 30 年前程度の間には，バブル崩壊，平成不況といった職業をとりまく環境に大きな影響を与えた出来事があり，その前後では社会経済的な面でも多くの点で差異があると考えられるためである。さらに現在のキャリア教育の発端ともいえる中央教育審議会答申が 1999 年に提出され，2004 年の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」などを踏まえて推し進められたことから，現在と 30 年程度前の大学生は，「キャリア教育世代」と「進路指導世代」ともいえる差を反映していると考えられるためである。このような社会的変化の影響を考慮するために，30 年程度という期間の設定は適当と考えられる。これらの差異を踏まえながら，学生の職業的アイデンティティについて検討したい。

なお本研究では，アイデンティティについてステイタス論からアプローチする。ステイタス論は，Erikson の言及をもとに Marcia（1966）が提唱したものであり，crisis（以後，危機）と commitment（以後，積極的関与）の有無を基準として複数のアイデンティティ・ステイタス（同一性地位）に分類するものである。中西（1983）は，それをアイデンティティの概念をかなり狭く限定しているとしながらも，明確な操作的定義がなされる点や，職業的役割のようなアイデンティティの感覚とは異なる側面を把握できるという特徴を指摘している。

今回，30 年程度以前の大学生と比較検討を行うために，具体的には中西（1983）の研究に注目する。この研究に注目する理由は，調査時期が比較に適していることに加え，その調査法にある。Marcia（1966）や，それを参考に我が国の学生を対象に研究を実施した無藤（1979）など，ステイタスの把握には面接法が用いられることも多いが，中西では質問紙法が用いられており実施が容易である。また看護という専門職課程を含む学生に実施されており，基礎統計量も所属別に開示されている。それゆえ，比較検討に適しているといえるだろう。

以上のように，本研究では，現代大学生の職業的アイデンティティ・ステイタスについて，約 30 年前の大学生と比較を通して理解を深めることを目的とする。また今回得られたデータに関しては，若干の追加分析を行う。

方法

調査時期および対象

東海，関西地方にある 7 つの大学で，学部生を対象に 2014 年 5 月から 7 月にかけて調査を実施した（この調査の一部は浦上（2016）で公表しているが，今回の分析では欠損値の関係上，一部除外されている）。授業等において質問紙を配布し，説明と協力の依頼を行い，その場もしくは後日に回収を行った。なお質問紙は無記名であり，調査への協力は任意であった。分析には欠損値をもたず，かつ卒業後の就職先が決まっていない 18 歳から 26 歳までの回答，1143 名分を用いる（男 586 名，女 557 名）。なお対象の所属は，いわゆる文系，理系の学部・学科に加え，専門職者の養成を目的とする，教員養成系学部，看護学部を含んでいる。

調査内容

職業的アイデンティティ・ステイタス　中西（1983）が，アイデンティティ・ステイタスを同定するために作成したものを用いた。これは Marcia（1966）による危機と積極的関与の有無を基準としたマニュアルをもとに，同一性達成，モラトリアム，早期完了，同一性拡散，疎外的達成（alienated achievement）の 5 つのステートメントを提示し，それぞれについてあてはまる程度を 5 段階で回答させ，その後最もあてはまるステートメントを 1 つ選ばせることによって対象のアイデンティティ・ステイタスを同定するという方法である。なお，現在の社会状況等を鑑み，オリジナルのステートメント内容を一部修正した。具体的には疎外的達成を修正した点，「両親」という表記を「親」に統一した他，一部仮名漢字表記を改めた（Appendix 参照）。あてはまる程度は，中西（1983）にしたがい，「非常によくあてはまる」「かなりあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の 5 段階で求めた。

属性等　回答者の属性に関して，学部・学科，学年，性別，年齢について回答を求めた。

なお，本研究の分析には，R（3.1.2）および各種パッケージを用いた。

結果

対象者の分類

今回の調査においては，方法に記したような属性の情報を得ており，それを利用した多様な分類が可能である。しかし，中西（1983）の結果との比較を行うためには，できるだけそれと符合した分類を行う必要がある。中西は，高校生と大学生のデータを得ているが，今回は大学生のデータのみを比較対象とする。また大学生は，国立および私立の教養部と学部の学生であり，その内訳は Table 1 に示す通りであった。

今回の調査対象者の分類はこれと類似するように行った。以前の教養課程は，概ね 1 年間から 2 年間であったことから，今回の調査対象者 1，2 年生を教養課程生と対応させ，以後，中西（1983）の研究における教養課程，および本調査における 1, 2 年生を低学年群とする。また中西の学部生は，本調査の 3，4 年生を対応させ，これを高学年群とする。さらに所属に関しては，中西では学部生の所属に教員養成系学部は含まれていないことから（「人・文・理・工」と記載されている），それ

Table 1　中西（1983）と本調査における対象の属性

	学年（課程）	性	学科	本分析での呼称	人数
中西	教養	男	教養部	低学年文理	136
		女	教養部	低学年文理	70
			医療短大看護科	低学年看護	40
	学部	男	人・文・理・工	高学年文理	94
		女	人・文・理・工	高学年文理	102
本調査	1，2 年生	男	文系・理系	低学年文理	480
			教員養成	低学年教員	61
		女	文系・理系	低学年文理	296
			教員養成	低学年教員	131
			看護	低学年看護	91
	3，4 年生	男	文系・理系	高学年文理	41
			教員養成	高学年教員	4
		女	文系・理系	高学年文理	35
			教員養成	高学年教員	4

は教養部生においても同様であろうと類推した。これらは専門職の養成を主とする課程ではない，いわゆる文系と理系の両方にわたると考えられる。本調査では，文系と理系の学部に加え，看護学部，教員養成系学部からのデータが得られている。そこで，中西のデータにおける教養部および「人・文・理・工」と，本調査における文系および理系の学部を対応させた。看護学部，教員養成系学部については別カテゴリとした（Table 1 参照）。

職業的アイデンティティ・ステイタスの分布状況

まずは今回調査結果を概観し，その後に中西（1983）の結果と今回調査の結果を比較してみたい。なお本調査で用いたステートメントは中西（1983）に小修正を施してはいるが，その内容はほぼ同じと見なして以下の分析をすすめる。ただし，Table 1 に明らかなように，今回調査の高学年群は人数が少ない点に留意が必要といえる。また高学年教員は男女ともに 4 名であったので以下の分析では除外した。

Figure 1 に男子学生によって選択されたステイタスの分布の様相を示す。今回の調査結果では，低学年文理において同一性拡散ステイタスの者が最も多く，それにモラトリアムが続いている。この 2 つのステイタスで全体の 80％弱とその大半を占める。ところが低学年教員に目を向けると，文理とは大きく異なる様相が認められる。そこでは同一性達成ステイタスが半数以上を占めており，続いて早期完了が多い。低学年文理において大半を占めていた同一性拡散，モラトリアムの各ステイタスは合わせても 20％強に留まっており，この点は大きな差異と指摘できるだろう。高学年文理に関しては人数が少ないため留意が必要であるが，低学年文理とほとんど変化がないといってよいであろう。

次に女子学生（Figure 2 参照）であるが，低学年文理においては同一性拡散ステイタスの者が最も多く，それにモラトリアムが続いている。そしてこれらのステイタスで全体の 80％程度を占め

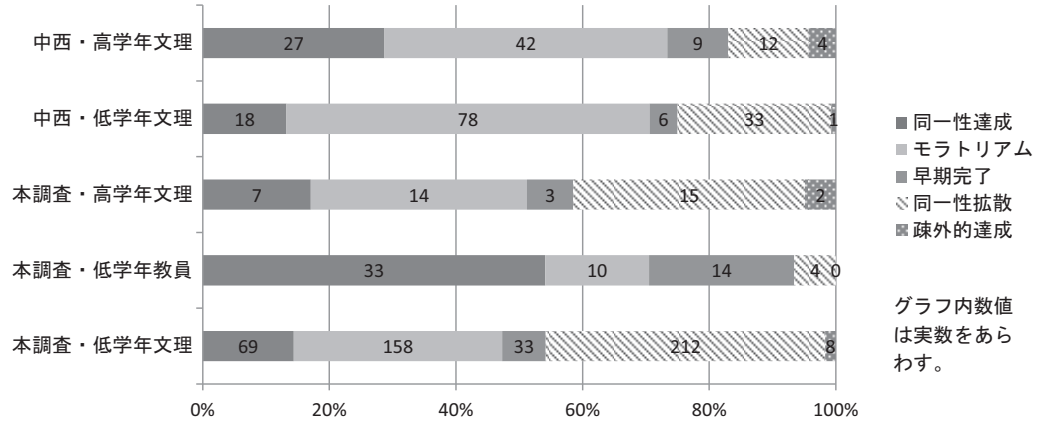


Figure 1　選択されたステイタスの様相（男子学生）

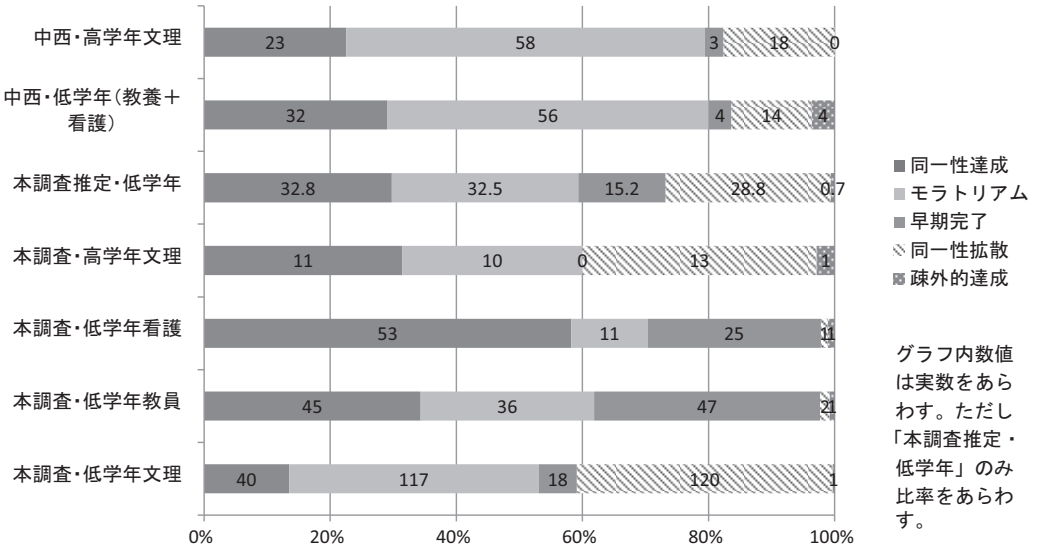


Figure 2　選択されたステイタスの様相（女子学生）

ている。低学年教員では早期完了と同一性達成が多く，また割合が拮抗している。これらのステイタスに比べるとモラトリアムは若干少ないが，対象者のほぼ全てがこれら３つのステイタスのいずれかに該当している。低学年看護では，同一性達成ステイタスが半数以上を占め，早期完了が30％程度，モラトリアムが10％程度であった。人数が少ないという点で注意が必用な高学年文理に関しては，低学年文理と比較して同一性達成ステイタスが多く，モラトリアムが少ないという傾向を指摘できよう。

性差の観点からは，低学年文理では同一性拡散ステイタスの者が最も多く，それにモラトリア

ムが続くという傾向に加え，そしてこれらのステイタスで全体の 80％程度を占めるという点でも，男女はかなり類似している。これら文系，理系の学部に在籍する者では，性差はほとんどないといえるだろう。低学年教員では，多少性別による差が認められ，女子学生で同一性達成ステイタスが少なく，モラトリアム，早期完了の比率が多いといえるだろう。低学年看護は女子学生のみであるが，そのステイタスの様相は男子学生の低学年教員と類似した傾向が認められる。

次に，中西（1983）の結果との比較という観点からその特徴を指摘する。男子学生においては（Figure 1 参照），十分な比較ができるのは低学年文理のみといえるだろうが，全体的傾向として今回の調査の方がモラトリアムステイタスが少なく，同一性拡散ステイタスが多いという点を指摘できよう。対して，同一性達成ステイタスや疎外的達成ステイタスの比率はあまり変化がないようである。

女子学生については，中西（1983）の結果では教養部と医療短大看護科別の地位分布が示されておらず，それらはひとつのサンプルとしてまとめられている（Figure 2 中の中西・低学年（教養＋看護））。ところが先にも指摘したように，今回の調査においては低学年文理と低学年看護ではその比率の様相が大きく異なっていた。そのため，教養部と医療短大看護科をまとめている中西の低学年の結果と，今回調査の低学年文理を比較することは妥当ではないかもしれない。そこで今回調査の低学年文理と低学年看護における各ステイタスの比率と，中西における教養部と医療短大看護科の人数比を用いて，中西の分類に対応するサンプルを推定し，そこにおける各ステイタスの割合を算出した（Figure 2 中の本調査推定・低学年）。これも参考資料に加えながら比較を行うと，男子学生同様に，今回の調査ではモラトリアムステイタスが少なく，同一性拡散が多いという点を指摘できよう。今回の調査から推定された低学年の様相も考慮すれば，早期完了ステイタスも今回の方が多い傾向があるといえるかもしれない。他方，同一性達成ステイタスや疎外的達成ステイタスの比率はあまり変化がないようである。

各ステートメントへの反応に関する検討

次に，各ステートメントへの回答の平均値について検討を行う（Table 2）。なお，中西（1983）はその数値化を 0 から 4 で行っているが，本論文では本調査での数値化に合わせ，1 から 5 に換算して示している。

まず今回の調査結果であるが，男子学生の各ステートメントへの回答の平均値は，先の各ステイタスの分布状況で明らかになった傾向を裏付けるような様相がみられる。低学年文理では，同一性拡散ステイタス，モラトリアムステイタスが多いということを裏付けるように，モラトリアムと同一性拡散の得点の両方が 3（どちらともいえない）を越えている。早期完了や疎外的達成は，平均値が 2(あまりあてはまらない)程度である。低学年教員では同一性達成と早期完了の平均値が高く，同一性達成ステイタスが半数以上を占め，続いて早期完了が多かったことと符合している。そしてモラトリアムと同一性拡散の得点，特に同一性拡散の得点は低学年文理に比べて大きく低い。疎外的達成を除き，このように低学年文理と教員では各ステートメントへの回答も大きく異なっている。高学年文理は低学年文理に比べモラトリアムと同一性拡散の得点で比較的大きな違いがみられるがいずれも有意な差ではなく，平均値が下がっているとはいえない。

女子学生については，低学年文理，高学年文理とも，モラトリアムと同一性拡散の得点が高めである。高学年文理においては若干早期完了が低めという特徴がうかがえる。高学年文理では，早期完了ステイタスを選択した者はみられなかったこととも関連するであろう。低学年文理と比較する

Table 2　対象者の属性別ステートメントに対する評定

		人数		同一性達成	モラトリアム	早期完了	同一性拡散	疎外的達成
男子学生	本調査・低学年文理	480	平均値	2.51	3.10	2.05	3.15	1.81
			SD	(1.15)	(1.10)	(1.17)	(1.24)	(0.92)
	本調査・低学年教員	61	平均値	3.72	2.36	3.31	1.87	1.52
			SD	(0.93)	(1.16)	(1.10)	(0.96)	(0.83)
	本調査・高学年文理	41	平均値	2.49	2.83	1.85	2.76	1.68
			SD	(1.27)	(1.09)	(1.17)	(1.39)	(1.01)
	中西・低学年文理	136	平均値	2.55	3.52	1.86	2.84	1.66
			SD	(1.09)	(1.02)	(0.96)	(1.32)	(0.88)
	中西・高学年文理	94	平均値	2.90	3.19	2.01	2.21	1.70
			SD	(1.15)	(1.09)	(1.03)	(1.19)	(0.95)
女子学生	本研究・低学年文理	296	平均値	2.51	3.10	2.05	3.15	1.81
			SD	(1.15)	(1.10)	(1.17)	(1.24)	(0.92)
	本調査・低学年看護	91	平均値	3.95	2.01	3.53	1.57	1.42
			SD	(0.85)	(1.09)	(1.18)	(0.76)	(0.65)
	本調査・低学年教員	131	平均値	3.53	2.70	3.37	1.69	1.47
			SD	(0.96)	(1.22)	(1.19)	(0.84)	(0.75)
	本研究・高学年	35	平均値	2.63	3.17	1.60	2.94	1.54
			SD	(1.37)	(1.22)	(0.98)	(1.37)	(0.82)
	中西・低学年（教養＋看護）	110	平均値	2.95	3.37	1.90	2.26	1.76
			SD	(1.28)	(1.18)	(1.02)	(1.18)	(0.91)
	中西・低学年看護	40	平均値	3.42	3.07	1.87	1.82	1.62
			SD	(1.22)	(1.17)	(0.87)	(1.02)	(0.82)
	中西推定・低学年教養	30	平均値	2.68	3.54	1.92	2.51	1.84
	中西・高学年文理	102	平均値	2.83	3.50	1.71	2.29	1.75
			SD	(1.24)	(1.20)	(0.77)	(1.28)	(0.86)

と有意な低下が認められた（$t(46.3) = 2.51, p < .05$）。他方，低学年看護や低学年教員では，低学年文理と大きく異なる平均値が認められている。同一性達成や早期完了の得点が高く，同一性拡散が低いところが共通する特徴といえるだろう。このように低学年看護と低学年教員は類似した平均値であるが，低学年教員の方がモラトリアムが高めである（$t(206.5) = 4.41, p < .01$）という特徴も認められる。

性差については，低学年文理，高学年文理とも，男女は類似しているといえるだろう。ステイタスにおいては，低学年教員で多少性別による差が認められたが，平均値においてはいずれにおいても有意な差は認められなかった。

男子学生における中西（1983）との比較の観点からは，低学年文理でモラトリアムの低下，同一性拡散の上昇という傾向が認められるといえよう。検定を行ったところ，やはりモラトリアムと同一性拡散においてのみ有意な差が認められた（順に$t(231.5) = 4.16, p < .01$; $t(207.3) = 2.45, p < .05$）。高学年においては，同一性達成やモラトリアムの低下，同一性拡散の上昇という傾向が認められるが，検定の結果では同一性拡散のみで有意な差が認められた（$t(66.7) = 2.21, p < .05$）。

女子学生については，中西（1983）には，教養課程の教養部と医療短大看護科をまとめた場合の

平均値と，医療短大看護科のみの平均が記載されている。そこで，これらの結果から教養部のみの平均値を算出した（Table 2 中の中西推定・低学年教養）。この推定された平均値は，男子学生の中西・低学年文理とほぼ同等といえるだろう。推定された値と本調査の低学年文理を比較すると，本調査の方がモラトリアムが低く，同一性拡散が高いという傾向が認められる。これもまた，男子学生と同様な結果といえるだろう。低学年看護においては，その比較から今回の方が同一性達成，早期完了が高く（順に $t(56.3) = 2.49, p < .05$; $t(99.4) = 8.97, p < .01$），モラトリアムが低かった（$t(70.0) = 4.87, p < .01$）。また高学年においては，同一性拡散で今回の調査の方が高いこと明らかとなった（$t(55.7) = 2.46, p < .05$）。

今回調査のデータを用いた追加分析

以下では今回調査のデータを用いて，本研究独自の分析を行う。なお，以上の検討において性差はあまり認められなかったので，男女をまとめて分析を行った。

今回調査において最終的に判断されたステイタスごとに，各ステートメントにおける平均値を算出した。その結果を Table 3 に示す。いずれのステイタスにおいても，対応するステートメントの平均値が最も高い。また早期完了ステイタスを除き，対応しないステートメントの平均値は 3（どちらともいえない）を下回っており，これは各ステートメントへの評定と，最終的なステイタスの選択とが整合していることを示しているといえるだろう。

次に，5 つのステートメントそれぞれに回答があることから，それらを用いて対象者を分類することを試みた。Ward 法によるクラスター分析を行い，得られたデンドログラムから，5 つのクラスターを抽出することが適切と判断した。そこで 5 つのクラスターを抽出し，クラスターごとに各ステートメントの平均値を算出した（Table 3）。加えて，地位とクラスターの度数分布表を作成し（Table 4），コレスポンデンス分析を行った。その結果が Figure 3 である。なお第 1 軸の寄与率は 73.51，第 2 軸が 26.49 であった。

見いだされた各クラスターについては，その平均値の様相から，クラスター 4 で同一性拡散のみが高いが，あとのクラスターは複数の項目で平均値が 3 を越えるという特徴を見いだせる。これは，先に概観したステイタスごとの平均値の特徴とは異なる点である。さらにコレスポンデンス分析の結果を加味すれば，いくつかのクラスターは典型的ステイタスの折衷型といえるだろう。

またコレスポンデンス分析の結果として布置されたステイタスとクラスターの特徴から，第 1 軸が同一性達成，早期完了，同一性拡散のステートメントに対する反応，第 2 軸がモラトリアムのステートメントに対する反応に対応していると推察される。各ステートメントへの回答間の相関係数を算出したところ（Table 5），同一性達成，早期完了，同一性拡散の間に比較的強い関連が認められた。またモラトリアムは，他の変数のいずれとも同程度の弱い関連にあった。

Figure 3 の中央付近には疎外的同一性ステイタスやクラスター 5 が位置している。これらの群の各ステートメントへの回答の様相から，中央付近は積極的に疎外的達成を選択している場合もあるが，いずれのステートメントにも同程度あてはまると回答する場合といえるだろう。これを囲むように，逆 U 字，もしくは逆 V 字状に各ステイタス，クラスターが位置していると見なせる。

Table 3　ステイタス別，クラスター別のステートメントに対する評定

	人数		同一性達成	モラトリアム	早期完了	同一性拡散	疎外的達成
同一性達成ステイタス	262	平均値	4.09	2.32	2.97	1.76	1.50
		SD	(0.65)	(1.01)	(1.08)	(0.84)	(0.75)
モラトリアムステイタス	357	平均値	2.66	3.96	1.97	2.62	1.70
		SD	(0.84)	(0.71)	(0.91)	(1.01)	(0.81)
早期完了ステイタス	142	平均値	3.54	1.99	4.44	1.54	1.48
		SD	(1.11)	(1.02)	(0.64)	(0.80)	(0.78)
同一性拡散ステイタス	368	平均値	1.76	2.74	1.39	3.98	1.69
		SD	(0.79)	(0.89)	(0.67)	(0.78)	(0.85)
疎外的達成ステイタス	14	平均値	2.79	2.29	2.50	2.93	3.71
		SD	(1.31)	(1.20)	(1.51)	(1.21)	(1.07)
クラスター1 (cl1)	241	平均値	4.03	1.62	3.76	1.27	1.36
		SD	(0.93)	(0.63)	(1.13)	(0.46)	(0.70)
クラスター2 (cl2)	290	平均値	3.31	3.57	2.68	2.04	1.40
		SD	(0.87)	(0.91)	(1.12)	(0.78)	(0.52)
クラスター3 (cl3)	249	平均値	2.27	3.86	1.56	3.74	1.67
		SD	(0.88)	(0.60)	(0.65)	(0.70)	(0.58)
クラスター4 (cl4)	218	平均値	1.56	2.25	1.22	3.73	1.22
		SD	(0.61)	(0.64)	(0.57)	(1.03)	(0.43)
クラスター5 (cl5)	145	平均値	2.56	3.22	2.22	3.30	3.26
		SD	(1.03)	(1.02)	(1.09)	(1.02)	(0.51)

Table 4　ステイタスとクラスターのクロス表

	同一性達成ステイタス	モラトリアムステイタス	早期完了ステイタス	同一性拡散ステイタス	疎外的達成ステイタス	計
cl1	137 (56.8)	1 (0.4)	101 (41.9)	0 (0.0)	2 (0.8)	241
cl2	94 (32.4)	153 (52.8)	35 (12.1)	7 (2.4)	1 (0.3)	290
cl3	5 (2.0)	135 (54.2)	0 (0.0)	109 (43.8)	0 (0.0)	249
cl4	5 (2.3)	23 (10.6)	1 (0.5)	189 (86.7)	0 (0.0)	218
cl5	21 (14.5)	45 (31.0)	5 (3.4)	63 (43.4)	11 (7.6)	145

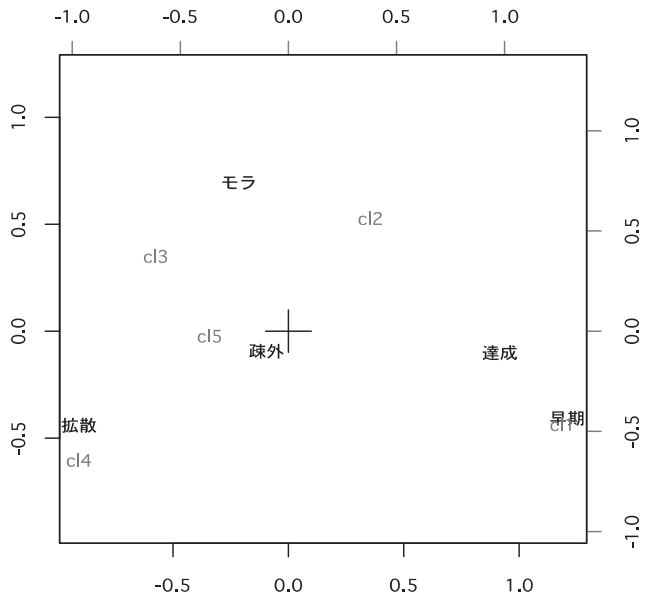


Figure 3　コレスポンデンス分析の結果

Table 5　各ステートメントに対する評定間の相関

	同一性達成	モラトリアム	早期完了	同一性拡散	疎外的達成
同一性達成	1.00				
モラトリアム	− .13	1.00			
早期完了	.64	− .26	1.00		
同一性拡散	− .56	.24	− .52	1.00	
疎外的達成	.00	.16	.02	.18	1.00

考察

本研究は，大学生の職業的アイデンティティ・ステイタスについて，約 30 年前との比較を通して，また多少の追加的分析を行い，現代大学生の職業的アイデンティティ・ステイタスについての理解を深めることを目的とした。

今回の調査結果から推察される，現代大学生の職業的アイデンティティにおける特徴として，看護師や教員など専門職を養成する学部と，それ以外の文理系学部の学生では職業的アイデンティティの様相に大きな違いがあることを指摘できる。前者の学部では同一性達成や早期完了のステートメントにあてはまると回答する程度が高く，同一性達成ステイタスや早期完了ステイタスにある学生が多かった。他方でその他の学生は，モラトリアムや同一性拡散のステートメントにあてはまると回答する程度が高く，モラトリアムステイタスや同一性拡散ステイタスにある学生が多かった。本調査の対象はその多くが大学 1，2 年生であったにもかかわらず，このような学部による差異が

認められた。なお，このような傾向には，性差，学年差はあまりみられなかった。

今回の調査対象者の多くが大学 1，2 年生であったことを踏まえると，専門職を養成する学部とそれ以外の文理系学部の間に認められたこのような差は，大学教育によって形成されたものではなく，入学以前からそのような傾向があったと考えるべきではないだろうか。中西（1983）は高校生のデータも得ているが，そこでは看護科の高校生は，普通科の高校生や，本研究でも取り上げた医療短大看護科の学生よりも，職業的アイデンティティにおいて同一性達成や早期完了が高いことが見いだされている。中西はこの結果に対して，「特別な職業教育を受けた職業意識の高い看護科高校生は普通科高校生や教養部学生よりも高い職業的同一性地位に達している」と述べているが，この点については検討の余地があろう。

そこで，専門職を養成する学部に在籍する学生の職業的アイデンティティについてさらに検討してみたい。その特徴が生じた理由として，ここでは教育の影響を取り上げる。学校教育におけるキャリア教育では，自分自身と社会をつなぐ鍵として，将来やりたいことや夢などが取り上げられることが多い。中西（1983）の早期完了ステートメントには，「小さいころからなりたいと思っていた職業だからです」といった文が含まれている。小さいころから，やりたいことや夢から職業へとアプローチしてきたのであれば，小さいころからなりたかったものが進学先の選択や職業的アイデンティティの形成に影響を与えていることは想像に難くない。それゆえ，専門職養成系では，低学年でもモラトリアムステイタスが少なく，早期完了ステイタスが多いのではないだろうか。他方で中西（1983）の得ているデータでは，看護科学生でもモラトリアムステートメントでの平均値が高い（Table 2 参照）。これには当時の教育，すなわち進路指導の影響が反映されているのではないだろうか。従来の進路指導に対しては，偏差値による輪切り指導など，興味関心の方向性よりも，学力に応じた進路選択をすすめるといった傾向が指摘されていた（たとえば，三村 , 2004）。看護科学生でもモラトリアムステートメントでの平均値が高かったことや，高校看護科の生徒との逆転現象がみられたことには，このような教育的背景が影響しているのではないだろうか。

このように推測すると，先の中西（1983）の解釈とは異なり，現在の職業的アイデンティティ，もしくはその原型となるようなものは，青年期の早い時期，または青年期以前に形成される可能が考えられる。そして，現在のキャリア教育はそれを促進するように作用しているともいえるだろう。

さらに専門職養成を主としない文系，理系に目を向けると，そこにはモラトリアム的心性の減少と同一性拡散的心性の増加が認められる。モラトリアム的心性は，現在，職業について考えている最中であることを意味し，同一性拡散は関心がなく，考えることを先延ばしにしていることを意味する。今回の調査において，そのような学生が専門職養成ではない学部で多くみられたのはなぜであろうか。一時ほどの深刻な就職難の時期は過ぎたとはいえ，現在の学生の体験してきた期間に就職が楽であった時期はない。もしこういった社会的背景が学生に危機感を生じさせ，職業的アイデンティティにも影響を与えるならば，モラトリアム的心性の減少や，同一性拡散のステートメントの肯定にはつながりにくいはずである。また進路指導からキャリア教育へと移り変わった結果とも考えにくい。もしそれが効果をもたらしているならば，たとえば同一性拡散が減少するなどといった変化がキャリア教育の主旨と整合的であろう。

そこで別の解釈を試みたい。たとえば時代背景の厳しさは学生に危機感を生じさせると考えられるが，それは学生の積極的な対応につながるのではなく，予期的な無力感につながり，考えることを先延ばしにすることを助長しているのかもしれない。またキャリア教育の点では，それが成果を得られなかった者を生み出しているといえるのかもしれない。小さいころからのキャリア教育で，

自分と社会をうまくつなげられた場合は，たとえば専門職養成系の学生のような早期完了や同一性達成といったアイデンティティ・ステイタスの特徴につながるであろう。具体的な職業選択が不確定で，多少先延ばしになる文系，理系を選んだ学生については推測が難しいが，少なくとも同一性拡散といった特徴はつながらないはずである。しかし，これまでのキャリア教育の中で自分と社会をうまくつなげられなかった場合はどのようになるだろうか。考えることを避け，無関心や問題の先送りをするような姿勢は，苦手な教科に対する学習姿勢とも重なってみえる。学校におけるキャリア教育は，一方でキャリア教育に対する，もしくは職業を考えることに対する苦手意識を生み出してはいないだろうか。これらはあくまでも結果に対する解釈例に過ぎず，本論では触れてこなかった，いわゆる大学全入の時代になったことや「ゆとり教育」の影響も考えられる。職業について考えることを避け，無関心や問題の先送りをするような姿勢は，社会への移行を間近に控えた大学生として望ましいものとはいえない。早急の検討が必要であろう。

その他，本研究では中西（1983）との比較のみならず，独自の分析も行った。コレスポンデンス分析の結果，Figure 3 のようなステイタスやクラスターの布置を得た。さらに同一性達成，早期完了，同一性拡散の間に比較的強い関連があり，他方でモラトリアムは他のステイタスと比較的独立しているという結果も得られた。ステイタス論は Marcia（1966）による危機と積極的関与の有無を基準としているため，論理的にはコレスポンデンス分析で 2 軸を抽出すると，それらが危機および積極的関与と何らかの関連を推察できるものであってもおかしくないだろう。しかしながら，今回の結果では同一性達成ステイタスと早期完了ステイタスが近く，危機および積極的関与との関係でこの布置の様子を明確に説明することが難しい。今回の結果を解釈するとすれば，第 1 軸は，現在において，つきたい職業が定まっているか，定まっていないか，第 2 軸が悩んでいるか，いないか，ということをあらわしていると考えられる。この結果に，モラトリアム的心性が減少し，同一性拡散や早期完了的心性が増大している傾向を重ね合わせると，現在の大学生の職業的アイデンティティは，早くから決めたか，まだ決まっていないかという大きな分け方から把握できるともいえるだろう。

本研究であつかっているモラトリアムは，積極的な探究を意味するものであり，たとえば小此木（1978）のいう「モラトリアム人間」のような性質を意味するものではない。そのため，中西（1983）の研究においてモラトリアムステイタスが多いことを，当時の「新しいモラトリアム心理」（小此木，1978）で説明することは適切ではない。今となれば，いつまでもモラトリアム状態に留まろうとしていると指摘されていた時代にもかかわらず，比率的に現在よりも多くの大学生が Erikson のいうモラトリアム（古典的モラトリアム心理：小此木，1978）を経験していたところに注目するべきかもしれない。また，少なくとも職業的な側面では，従来のモラトリアムを経て達成へという経路が，現在の大学生において一般的ではなくなっているのかもしれない。

アイデンティティについては，Marcia（1976）はひとつのきっかけとなった研究といえるだろうが，現在では動的なものと考えられている。揺れ動き変化することが特徴であるが，その過程にはやはりモラトリアムが位置づけられる（たとえば，杉村，2008）。職業アイデンティティは，冒頭でも述べたように社会の影響を受けやすいといえるだろう。それゆえ，就職までの時間が短い高学年のデータ不足している本調査では，大学生全体の様相を描けていない可能性がある。大学生の職業的アイデンティティ・ステイタスのさらなる解明に向け，十分に代表性のあるサンプルを確保し，断続的な調査を繰り返すことが期待される。

文献

中央教育審議会　1999　初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）　1999 年 12 月 16 日〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309737.htm〉（2016 年 10 月 4 日）

Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society. Second Edition Revised and Enlarged*. W. W. Norton & Company, Inc. (E・H・エリクソン　仁科弥生（訳）　1977　幼児期と社会Ⅰ，みすず書房)

畠中易子・遠藤善裕　2016　看護実践能力と職業的アイデンティティの関連から見る中堅看護師の実態　滋賀医科大学看護学ジャーナル，***14***，13−17.

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議　2004　キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書―児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために―　2004 年 1 月 28 日〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002.htm〉（2016 年 10 月 4 日）

Marcia, J. E.　1966　Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality & Social Psychology*, ***3***, 551−558.

Marcia, J. E.　1976　Identity six year after: A follow-up study. *Journal of Youth and Adolescence*, ***5***, 145−160.

三村隆男　2004　キャリア教育入門　実業之日本社 .

三津橋佳子・関由起子　2016　5 年一貫看護師養成課程における生徒・学生の職業的アイデンティティ達成スタイルとその関連要因　埼玉大学紀要　教育学部，***65(1)***，131−143.

宮下一博・田辺敏明・小柳晴生・岡本祐子・上地雄一郎・磯部修一・沢田章子・森川早苗　1984　外国（ことに米国）における同一性研究の展望　鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子（共著）　アイデンティティの研究の展望Ⅰ　ナカニシヤ出版　pp. 154−166.

無藤清子　1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性　教育心理学研究，***27***，178−187.

中西信男　1983　青年期自我同一性地位に関する研究　大阪大学人間科学部創立十周年記念論集　大阪大学人間科学部，pp. 395−453.

小此木啓吾　1978　モラトリアム人間の時代　中央公論社 .

杉村和美　2008　大学生の自己分析に役立つエリクソン理論のポイント　宮下一博・杉村和美（著）　大学生の自己分析―いまだ見えぬアイデンティティに突然気づくために―，ナカニシヤ出版　pp. 81−103.

浦上昌則　2016　職業観と個人志向性・他者志向性，社会的被受容感の関連　アカデミア．人文・自然科学編，***11***，91−104.

Appendix

今回の調査で利用したステートメントは以下の通りである。なお仮名漢字以外で，中西（1983）によるオリジナルのステートメントから変更した部分には下線を付した。

回答は，まずそれぞれについて「非常によくあてはまる」から「全くあてはまらない」の5段階で回答を求める。その後，5つのステートメントのうち，現在の自分を最もよくあらわしているものの選択を求めた。

論理的には各ステートメントへ評価において最もあてはまる度合いが高かった地位，もしくはそれらの地位の中から最終的な地位が選ばれるはずである。しかしながら，このような2段階の手順のため，その間に食い違いがある回答もあった。今回の分析では，食い違いがある回答もそのまま分析に用いた。

同一性達成

私には，将来つきたいと思っている職業があります。以前に，私は自分の好みや適性をもとにして，いくつかの職業を考えてみました。そして，さらに，自分自身の能力や親の希望，社会からの要請も考えたうえでひとつの職業を自分で選びました。現在はその職業につくために努力しています。今のところ，それを変えるつもりはありません。

モラトリアム

私は将来の職業をいくつか考えていますが，まだひとつにしぼっているわけではありません。だから，その中から自分にふさわしい職業を選ぼうと思っています。そのためには自分の能力とか社会からの要請，あるいは親の希望なども考えに入れなければならないと思います。とにかく積極的に自分にふさわしい職業をみいだせるよう努力しようと思っています。

早期完了

私はもう将来の職業を決めています。とくに考え抜いてこの職業を選んだわけではありません。小さいころからなりたいと思っていた職業だからです。親も私がその職業につくことを認めてくれるし，励ましてくれます。もちろん，私は将来その志望を変えるつもりはありません。

同一性拡散

私はまだ将来の職業について考えていないし，職業自体にあまり関心をもっていません。ばくぜんと「いいなあ」と思っている職業はありますが，その職業についてよく知りません。たとえば仕事の内容とか，その職業につくのに必要なことなどはまだ考えたことがないのです。だからもっと良いと思う職業がみつかれば今考えているものにこだわるつもりはありません。

疎外的達成

私は将来，定職につくつもりはありません。なぜかというと，現在の社会のあり方，職業のあり方に反発を感じるからです。だから，社会の秩序に従い，現実の社会組織に組み込まれるよりも，自分独自の道をすすみたいと考えています。